

# がん患者の妊娠 諦めないで

抗がん剤や放射線治療などでがん患者の生殖機能が低下し、妊娠できなくなるのを防ぐため、がん治療前に卵子や卵巣、精子などを凍結保存して生殖機能や妊孕性（妊娠できる可能性）を維持する技術がある。岡山大病院（岡山市北区鹿田町）で、がん患者の生殖医療などに取り組む同大医学部保健学部長、中塚幹也教授（57）に話を聞いた。



中塚幹也教授—岡山市北区鹿田町の岡山大

## 岡山大病院 中塚幹也教授に聞く

がん患者の妊娠について教えて下さい。

◆がん治療の進歩でがんを克服する人が増えています。それに伴い、治療後の生活の質（QOL）も求められるようになり、快適な日常生活を送ったり、カップルなどをも産み育てることがさらにQOLに関わります。

——生殖機能、妊孕性の温存とはどんなことをするのですか。

◆卵子の保存は、排卵誘発剤を使い、卵巣を凍結させ、麻酔をして卵巣に針を挿入します。パートナーがいない女性も、未受精卵をそのまま凍結保存、パートナーがいれば体外受精をして保存することもできます。

## 治療後も快適な生活を

所要期間も約20日、費用は30万円〜50万円です。卵巣の凍結保存は、腹腔鏡下手術などで組織の一部を採取する。手術の目的は、費用は約70万円、精子は男性に射精して凍結保存しますが、近頃でも用いられる補助する自体が豊富です。

——岡山全県の取り組みを教えてください。

◆岡大病院でがん患者の卵巣凍結保存をしたのは2006年、国内初でした。15年には体外受精などでの卵子や精子の産婦人科医と泌尿器科、また、受精卵を取り扱う「胚培養」の産科医と連携を取り、産科の連携強化した。生殖補助医療技術センターを国内の総合大学で初めて設置しました。センターでは産科と産科、産科と産科の連携を強化しています。

## 卵子など凍結保存 妊孕性を維持



◆岡山大病院内の産科のクリーンベンチ、体外受精をしない受精卵の培養や顕微鏡を必要とする岡大病院は、がん患者の妊孕性を維持するべく、産科と産科の連携強化を図っています。

## 選択肢として啓発必要

がん患者の生殖医療の課題はどんなことでしょうか。

◆まず、生殖機能、妊孕性温存治療という選択肢がある、というところを知ってほしい。患者だけでなく、医療側にもまだ十分に知られていません。がん患者の生殖医療を考えるネットワークが10年に県内の医療機関18施設、計1056人のがん治療に携わる医療スタッフを対象にアンケートした結果、9人が回答があります。がん患者の生殖機能温存について、知っている、と答えた人は全体の25%で、医師は8割でしたが、看護師は割と少なかった。



妊娠や出産などに関する基本的な説明資料も作製・無料配布されている

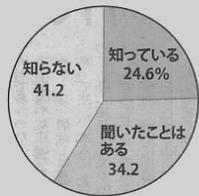
生殖機能温存について患者に説明しているか聞いたら、85%が説明していません。85%が説明していません。不妊の相談に来た患者で「妊娠について何も説明を受けていない」というのが、医師の不感を持っていました。

啓発活動が必要ですね。

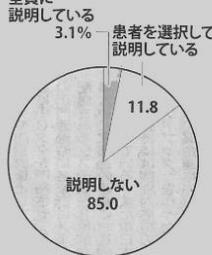
◆13年産科の専任の1割が説明を行って、産科と産科の連携強化を図っています。徐々に関心する人が増えています。徐々に関心する人が増えています。徐々に関心する人が増えています。

## 医療従事者の認識も不足

Q1・がん患者の生殖機能温存を知っているか



Q2・がん患者に生殖機能温存について説明しているか



患者に説明していただく必要があり、ネットは本内外の連携で、内部の生殖医療を強化するため、「リフレクティブ」(生殖センター)を昨年10月に岡大病院に開設しました。がん専門医や看護師、心理士などの人材やスキルをかし、患者への精神的サポートを強化した先進医療を目指しています。

患者さんに対しては、がん治療の拒否に妊娠などを聞かせる人もいます。聞かせる人もいます。聞かせる人もいます。

ませんが、岡山大病院相談センター(086・2355・6040)が岡大病院内にありますので、気軽に相談していただければと思います。